

## 今週の為替相場見通し(2022年2月7日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		114.16 ~ 115.59	115.20	114.30 ~ 116.30
ユーロ	(ドル)		1.1139 ~ 1.1483	1.1451	1.1350 ~ 1.1550
(1ユーロ=)	(円)		128.55 ~ 132.09	131.90	131.00 ~ 133.50
英ポンド	(ドル)		1.3389 ~ 1.3628	1.3525	1.3450 ~ 1.3650
(1英ポンド=)	(円)	*	154.38 ~ 156.51	156.03	154.80 ~ 157.20
豪ドル	(ドル)		0.6986 ~ 0.7168	0.7078	0.6960 ~ 0.7200
(1豪ドル=)	(円)	*	80.53 ~ 82.29	81.53	80.30 ~ 82.30

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、\*印の項目はブルームバーグ。

## 1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 甲斐 貴之

(1)今週の予想レンジ: 114.30 ~ 116.30 円

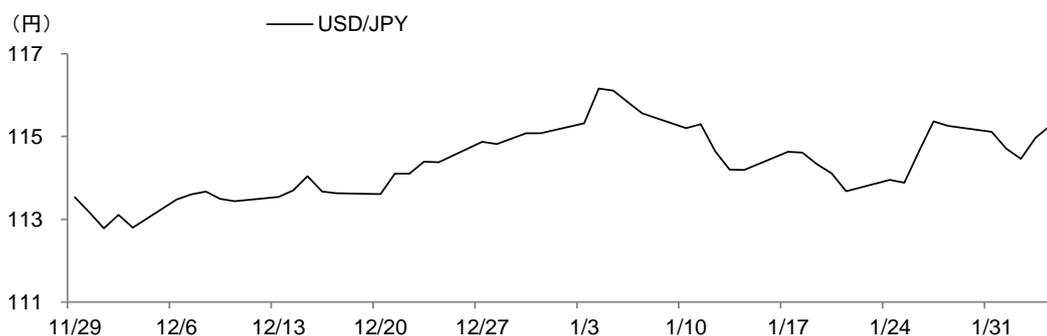
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は上値重く推移した。週初31日、115.25円付近でオープンしたドル/円は日経平均株価の堅調推移から一時週高値の115.59円まで上値を伸ばすも、海外時間に入ると独1月CPIが良好な結果になったことでドル売りが進み、114円台後半まで下落。売り一巡後は115円台前半まで反発した。1日、115円台前半で推移していたドル/円は、中国をはじめ主要なアジア市場が旧正月で休場となる中、米長期金利低下を背景にじり安の展開。海外時間でもその流れは継続しドル売りが加速、114円台半ばまで下落。その後も114円台後半で上値重く推移した。2日、ドル/円は引き続き旧正月で閑散取引となった中、114円台後半での小動きだったが、海外時間に発表の米1月ADP雇用統計の予想外の悪化に一時週安値の114.16円まで急落。売り一巡後は株式市場の堅調推移を受けて114円台半ば付近まで値を戻した。3日、114円台半ば付近で小動きだったドル/円は海外時間に入ると米金利上昇に伴うドル買いにサポートされて115円手前まで上昇、堅調に推移した。4日のドル/円は114.77円まで下落したものの、米1月雇用統計が予想を大幅に上回り、一時115.43円まで上昇し、115.20円で越週した。

今週のドル/円相場は緩やかな円安継続を予想する。米1月雇用統計がオミクロン感染拡大の影響で弱含むとみられていたものの、市場予想を大きく上回る結果となったほか、米1月平均時給も前回を上回るなど、再び市場の利上げ期待は高まった。1月後半からFRB高官による3月の+50bp利上げについて火消しのコメントが相次いでいたものの、10日(木)の米1月消費者物価指数が再び、市場予想を上回れば、さらに円安が進展する可能性もある。また、ECB、BOEのタカ派スタンスが露わになったことで、ECBの利上げに対する期待が高まるなど、クロス通貨買いの流れが継続すると思われる。一方で、日本の長期金利も上昇し、ついに5年債利回りがプラスになるなどの動きを見せたものの、日銀のスタンスは依然、緩和姿勢を貫いていることに加え、オミクロン株の感染拡大が続く中では緊急事態宣言がいつ出されるかも不透明な状況といえ、円離れが進みやすい展開といえる。今週は8日(火)に米12月貿易収支、10日(木)に米1月消費者物価指数、米12月卸売在庫、11日(金)に米1月財政収支、米2月シシガン大学消費者マインドが発表予定となっている。

(3)先週までの相場の推移

先週(1/31~2/4)の値動き: 安値 114.16 円 高値 115.59 円 終値 115.20 円



## 2. ユーロ

市場営業部 為替営業第一チーム 逸見 久貴

(1)今週の予想レンジ: 1.1350 ~ 1.1550 131.00 ~ 133.50 円

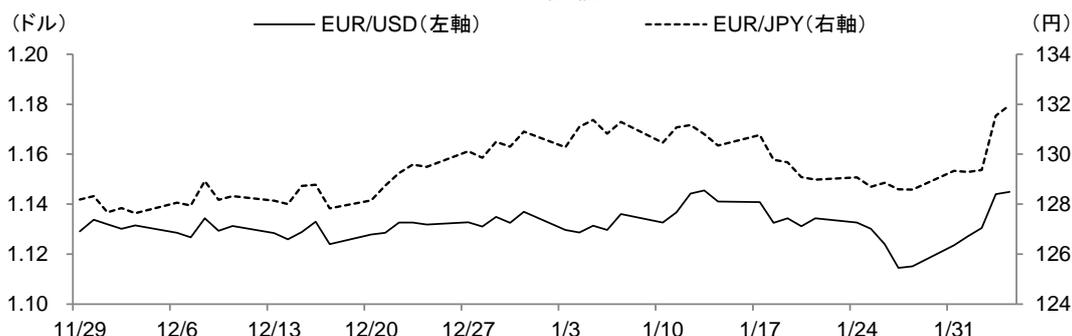
### (2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロドル相場は上昇。週初1月31日は1.1153でオープン。序盤はやや軟調に推移し、週安値1.1139をつけた。海外時間に入り、独1月CPIが予想を上回るとECBの年内利上げへの思惑が強まり、反発。1.12台に乗せ、その後も1.12台半ばまで底堅く推移した。翌2月1日、欧州株の堅調推移や仏1月CPIの強い結果がユーロ買いをサポートし1.12台後半まで上昇。一巡後は米金利上昇が足枷となり1.12台前半まで反落。終盤にかけては買い戻され、結局1.12台後半まで値を戻した。週央2日、ユーロ圏1月CPIが発表され、市場の予想を大幅に上回るとユーロ圏でのインフレ率加速懸念が強まり、ユーロ買いの展開。1.1330付近まで上昇したものの、BOEやECBの金融政策イベントを前に様子見ムードとなると1.13台前半を方向感なく推移した。3日、ECB政策理事会の結果が発表され、予想通り政策金利の据え置きが伝わると、1.1265付近まで下落。しかし、声明文に大きなサプライズは見当たらなかったためか売りは長続きせず、1.13手前まで値を戻した。その後、ラガルドECB総裁が記者会見で「インフレリスクは上振れ方向に傾いている」、「ECB政策理事会全体がインフレデータを懸念」と述べており、22年内利上げについて否定的な見方を示していた前回(12月)の会見と比べタカ派色が強まったとの見方から、ユーロ買いが急速に強まり、約2週間ぶりとなる1.14台を上抜けると、1.1451付近まで高値を更新。週末もユーロ買い優勢の展開は継続し、週高値1.1483まで上昇。米1月雇用統計の強い結果に1.14台前半まで下落する場面も見られたが、終盤にかけては値を戻し1.1451で越週。

今週のユーロ/ドル相場は1.14台半ばを中心としたレンジ推移を予想。先週3日のECB政策理事会では金融政策こそ据え置かれたものの、その後のラガルドECB総裁の会見はタカ派色の強い内容となった。インフレ高進の長期化懸念を背景に年内利上げを否定しなかったことから、市場では早期利上げへの思惑が強まり、ユーロ相場は対ドル、対円ともに急上昇した。為替相場は一時的に動揺が見られたものの、すでに一服感があり、株式市場も大きく崩れていないことから、一旦はイベントを消化したと考えたい。経常黒字による需給面での強さに加え、金融政策の正常化が意識され易くなったことで、ユーロの下値は固いと考えるが、1月会合で3月利上げを示唆したFedとの金融政策差は依然として大きく、ユーロが対ドルで騰勢を強める可能性も低いであろう。

### (3)先週末までの相場の推移

先週(1/31~2/4)の値動き: (対ドル) 安値 1.1139 高値 1.1483 終値 1.1451  
(対円) 安値 128.55 高値 132.09 終値 131.90



(資料)ブルームバーグ

### 3. 英ポンド

(1)今週の予想レンジ: 1.3450 ~ 1.3650 154.80 ~ 157.20 円

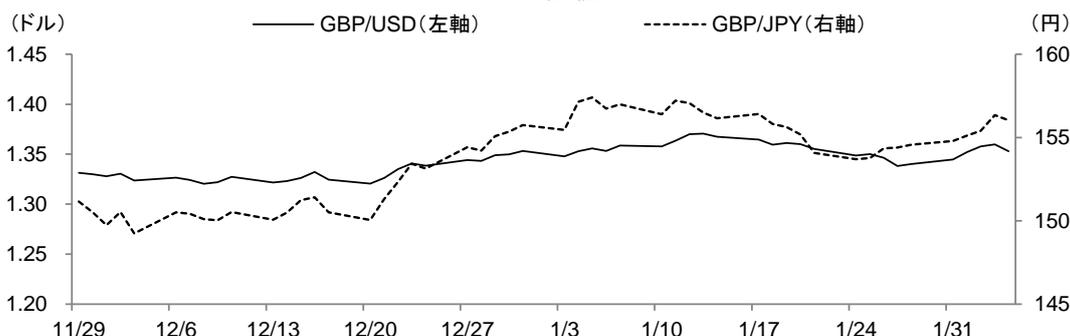
#### (2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、対ドルで、ほぼ一貫した堅調推移から週引けを控えて反落、対円では堅調気味の膠着から3日に水準切り上げ、週引けを前にやはり反落、対ユーロでは方向感を欠いた横ばいの先行から3日に乱高下、週引けにかけて一方的に下落と、主要通貨に対してもそれぞれ値動きが分かれた。最大の注目要因は、3日に結果が発表された英中銀金融政策委員会で、+25bpの基準金利引き上げ(利上げ後0.50%)は予想通りだったものの、その決定は5対4の僅差だった。4票は+50bp利上げに投じられた事実が想定外と受け止められ、直後の債券全面急騰を誘った。それ以上に意外だったのは、その後の欧州中銀ラガルド総裁の記者会見で、これまで「22年中の利上げはない」としてきた姿勢を、一転、「データ次第」と覆したことで、同銀による年内利上げ開始の織り込みが一気に加速、ユーロ全面高を招いた。2日までの値動きにはポンド側の要因は乏しく、ドル全面軟調の裏返しと言えた。アトランタ連銀ボスティック総裁(31日)、フィラデルフィア連銀ハーカー総裁(1日)、セントルイス連銀ブラード総裁(1日)ら米連銀高官が、相次いで3月の+50bp利上げや年4回(+25bp)の利上げに否定的な見解を示したことが、「予想外に利上げに消極的」と読まれたようだ。更に、2日発表された米ADPの1月雇用統計が▲301千人と、コロナ禍本格化後の最悪に落ち込んだこともドルの下押しを加速させたが、4日発表された(米労働統計局の)米1月雇用統計は、前月分の上方改定と合わせ大幅な雇用増を示し、逆に週引けに掛けてのドル全面反発に寄与した。

今週の英ポンド相場は、軟調気味の膠着を中心に予想。ただし、当面、対ドル、対円、対ユーロでの値動きはそれぞれ分かれる可能性が高いものと見込む。先週までの値動きに鑑みても、現在、通貨市場の最大の関心が各国中銀の金融政策動向に集まっているのは間違いない。足元物価動向、金融政策動向に関し、米連銀が頭ひとつ抜け出ているのは変わらないし、次に英中銀が続くとの認識も広く共有されているだろう。ただし、およそ市場(相場)と言われるものの全てが、既に織り込み済みの認識と、日々確認されていく現実とのギャップを取引する場であるならば、今後の金融引き締め動向を通貨押し上げ材料とする度合いの強さは、意外感の大きい順に、ユーロ圏>英>米という序列になる可能性が高い。2022年を通して、いずれも、現在認識されている以上に金融引き締めが加速していく可能性が高いものと見込んでいるが、その点、ほぼ等しく3者に共通するはずで、相対的な位置づけに変化はないだろう。なお、こうした認識は、いずれ円にも共有される可能性を見込んでいるものの、日銀の金融政策が通貨市場で材料視されるようになるのは、今しばらく先のことになるものと位置付けている。したがって、ポンドの先行きは、対ドルで上昇余地、対ユーロで下落余地が大きいものと考え、全般に軟調を中心に見込むのは、やはり、英政局の先行きに不安が大きいから。ロンドン警視庁が捜査に乗り出したことで、コロナ行動制限中に首相官邸などで行われたパーティー疑惑(所謂パーティーゲート)に関するグレイ第二事務次官報告書は一部しか公表されなかったものの(31日)、同報告書の公表まで態度を保留するとしていた与党保守党議員の中から、首相に反旗を翻す議員が既に続出している。ジョンソン首相にとってそれ以上に大きな痛手は、同首相の側近中の側近が、3日、5人まとめて辞任したこと。英政治は、北アイルランド議定書(NIP)を巡る混乱(北アイルランド議会最大勢力である民主統一党が、3日、英本土からの製品検査の一方的な破棄を宣言)、「生活費危機(物価高騰の折、4月から社会保険料率が引き上げられる(増税)予定)」などの懸案が山積する中、大きく迷走しようとしている。

#### (3)先週までの相場の推移

先週(1/31~2/4)の値動き: (対ドル) 安値 1.3389 高値 1.3628 終値 1.3525  
(対円) 安値 154.38 高値 156.51 終値 156.03



(資料)ブルームバーグ

#### 4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

(1) 今週の予想レンジ: 0.6960 ~ 0.7200 80.30 ~ 82.30 円

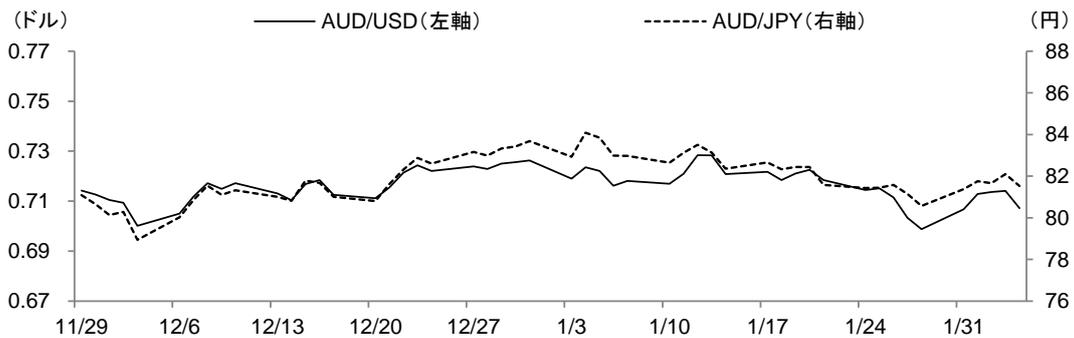
#### (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

31日は0.6990近辺でスタートし、月末調整フローも手伝って底堅く推移。今年初のRBA会合を翌日に控え0.7080近辺までラリーした。1日(火)、RBAは債券購入プログラムを2月10日で打ち切る事を発表した。QE撤廃は近い利上げを示唆するものではないと牽制したため、利上げ織り込みが進んでいた市場では期待剥落から一時豪ドル売りが優勢となり0.7035近辺まで下落。しかし経済見通しが上方修正された事で海外時間では豪ドルがサポートされ0.71台へ乗せた。RBAは今後のインフレや雇用の見通しを上方修正しており、失業率は今年中に4%を割り、2023年末までに3.75%近辺になると予想。コアインフレは次の四半期で3.25%まで上昇するとの予想が発表された。2日ロウRBA総裁は2022年経済見通しについての会見で「インフレが鎮静化する事で積極的利上げが必要になる可能性は低い」としたものの、「雇用とCPIの進展加速は利上げのタイミングを早めるとし、年内に金利が上がるというのが妥当なシナリオである」と述べた。3日(木)豪12月貿易収支は引き続き輸入が輸出を上回ったものの、貿易黒字は83.56億豪ドルに縮小した。昨年一年を通して鉄鉱石輸出は中国国内でのスチール生産抑制や二酸化炭素排出削減計画、電力供給不足が影響したことで伸び悩んでいたものの、足元は底堅く推移している。一方で今回は豪からの石炭輸出が約14.0%程減少した事が黒字額縮小に寄与したとみられる。NY時間ではメタプラットフォームズ(旧フェイスブック)の株価が決算発表後に27%大幅急落し、ハイテク株中心に売りが広がり、豪ドルも頭を抑えられる形となった。4日(金)はドル買いを背景に0.70台半ばまで下落。米1月雇用統計は雇用者数は+467k増加し、前回値・予想値を大きく上回りポジティブサプライズとなった。また前回値も+199kから+510kへ大幅に上方改訂された。加えて賃金が前月比+0.7%増。新型コロナ感染拡大にも関わらず雇用の底堅さを示したことからFRBのタカ派スタンスをより後押しし、3月に利上げに踏み切る観測がより強まり、米豪金融政策比較では米国がまた一歩リードする形となった。

今週は7日(月)中1月PMI、8日(火)豪1月景況感、9日(水)米12月貿易収支、10日(木)米1月CPI、11日(金)ロウRBA総裁の議会証言、米2月ミシガン大学消費者マインド等が発表予定。昨日6日、一部報道で今後2~3週間で国境が再開されると報じられた。本日、国家安全保障会議で議論された後、豪政府からなんらかの発表がある可能性がある。国境開放時期が前倒しとなれば豪経済にはプラスに作用するとみられる。RBA金融政策に関しては足元では現行の豪政策金利である0.1%から今年6月までに0.25%への利上げが織り込まれており、8月までに0.5%、年末までに1.0%に達すると織り込まれている。債券購入プログラムの終了、並びに直近2021年12月の失業率が過去最低水準付近の4%台前半であった事、2021年10~12月期豪コアCPIがRBAのインフレ目標レンジである2~3%の中間を超えた事を踏まえると、利上げ時期の前倒し期待は確実に高まっている。但し米金融政策と比較した際、利上げ時期やインフレ圧力度合いの乖離が浮き彫りになる場面では豪ドルにとって重しとなる。米雇用統計明けの今週は特段のニュースがない限り0.6960~0.7200レンジでの推移となるとみる。

#### (3) 先週末までの相場の推移

先週(1/31~2/4)の値動き: (対ドル) 安値 0.6986 高値 0.7168 終値 0.7078  
(対円) 安値 80.53 高値 82.29 終値 81.53



(資料)ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。